

Hardegger Urkunden 研究
— 4 枚の証文 (1334 b, 1334 c,
1335, 1336) の共通点について—

松尾 誠之

目 次

- 0. まえがき

- 1.0. **dialektal — mittelbairisch** な特徴 (表 1)
- 1.1. $b > w, w > b$
- 1.2. Svarabhakti
- 1.3. $o > a, a > o$
- 1.4. ウムラウト表記

- 2.0. **母音の表記**
- 2.1.0. v/u
- 2.1.1. 単独の v/u (表 2, 3)
- 2.1.2. \acute{v}/\acute{u} (表 4, 5)
- 2.1.3. $av/au, a\acute{v}/a\acute{u}$
- 2.1.4. ev/eu
- 2.2. 'Frau'
- 2.3. —reich↔—rich
- 2.4. anhangvnden

本文の一部 (1.0.—1.3., 2.1.0—2.1.2., 2.2., 2.3., 3.1., 3.2.) は1986年11月29日に佐賀大学で開催された日本独文学会西日本支部の第38回研究発表会で発表したものに基づいている。

- 3.0. 子音の表記
- 3.1. f ↔ v
- 3.2. sh
- 3.3. 重ね書き
- 3.4. -g ↔ -i-
- 3.5. -m ↔ -n-
- 3.6. -d ↔ -t
- 3.7. 'dreißigsten'
4. Häkchen
5. 結び

付： 注

文献表

Hardegger Urkunden (1334b, 1334c, 1335, 1336)

0. まえがき

以前 s 音を調べていて¹⁾類似の傾向を示す 4 枚の Urkunden (以下 Uk. と略す) が浮かび上った。それは 1334b, 1334c, 1335, 1336 である。これら 4 枚の Uk. は s 音以外にも共通する点がみられた²⁾。

本稿ではこれら 4 枚の Uk. の書法について、更にその他の共通点を調べることにする。比較対照のため、1324 A, B の Uk.³⁾ (以下 A, B と略記する) の用例を参照することがある。

個々の Uk. を表わす場合、作成年の上 2 桁の 13 を省略し、1334b なら 34b 等と略記する。語源は DuEty と Kluge によっているがいちいち記すことはしない。

用例の後の数字は行数を、×のついた数字は何回使用されているかの度数を表わす。

転写、用例で s で表わしているのは所謂「まるい s」である。但し、語末の場合は特に記さない。また er の省略は読みほどかない。例えば 34b : erb'n15 は erbern のことであるが、erbern とは記さず省略記号のついたまま転写している。

オリジナルはウィーンの Niederösterreichisches Landesarchiv にある。マイクロフィルム入手に当っては同文書館員 (1983 年当時) である Dr. Anton Eggen-dorfer 氏のお世話になった。記して感謝する。

1.0. dialektal — mittelbairisch な特徴

Wiesinger の表⁴⁾のうち neutral—bairisch には現れず, dialektal—mittelbairisch にもみ現れる特徴は次のものである。

I. $b > w$, $w > b$

II. Svarabhakti

III. $o > a$, $a > o$

IV. ウムラウト表記がないこと

I. — III. については表 1 を見れば 4 枚の Uk. は A, B に比べて方言性の強いことがわかる。次に順を追って見ていくことにする。

表 1

		A	B	34b	34c	35	36
I	$b > w$	0	1	5(4)	1	1	10(5)
	$w > b$	0	0	0	0	0	0
II	Svarabhakti	0	0	6(2)	3(1)	5(2)	8(3)
III	$o > a$	0	8(1)	4(1)	3(2)	10(3)	4(1)
	$a > o$	1	0	0	0	0	0

$b > w$: B : lewent 2

34b : Herwürch 6 Herwürgen 15 Weyerwerch 6 Hakenwerch 20
weleib 18

34c : weleib 13

35 : weleib 13

36 : wedachten 2 wehavsten 6—7 weleib 14 Herwürgen 4, 10

Svnnwerwerch 1 svnnweriger 9, 15 svnnwerig' 10 Svnnweriger
15

Svarabhakti : 34b : eriben 2, 12, 15 Gorig 1, 14, 19

34c : eriben 2, 4, 10

35	: eriben 2,3,11,11	Marigengab 5
36	: Eriben 3	<u>svnnweriger</u> 9,15 Perigaŵ 17
	eriben 10,13	<u>svnnwerig'</u> 10
		<u>Svnnweriger</u> 15

o>a : B : van 8x

34b : vargenant- 4x

34c : var genant- 5,13 2x, gebaren 16

35 : var genanter 1x vargenant- 4x vargeschriben 1x

Marigengab 1x Pravnstarfer 3x

(vgl. mit meins Prúder Insigel Albrechts . Pravnstorfer . 15)

36 : vargenant- 2x var geschriben 1x vargeschriben 1x

1.1. $b > w$, $w > b$ ⁵⁾

表中の数はのべ数であり、() 内の数字は同一の語—Herwúrch と Herwürgen も同一とみなす—を除いた数である。

4 枚の Uk. には $w > b$ の例はない。 $b > w$ は全体としてまとめれば Herwurg 4x, —werg—7x, we— 6x となり、特定の語、形態素に片寄っている。

weleib は 4 枚に共通している。これ以外に we—ではなく be—という綴りの現れることはない。34c, 35には Herburga の名前は出てこない。34b, 36に於て—bur—という綴りは出てこない。—werg についても、これ以外に—berg というような綴りは出てこない。

Bには lewent という $b > w$ の例が一つあった。

逆の $w > b$ という例は見当たらない。

1.2. Svarabhakti

eriben が 4 枚に共通して現れる。同一語の異形を除いて全体としてまとめれば eriben 13x Georgig 3x Marigengab 1x svnnweriger 4x Perigaŵ 1x となる。いずれも—rib—, —rig—という環境⁶⁾に現われている。注目すべきは $b > w$ の所でもとり上げた 33 : Svnnwerwerch 1で、*—werich とはなっていないことである⁷⁾。

A, B にはこの Svarabhakti の現象はみられなかった。

1.3. $o > a$, $a > o$

Wiesinger の表では mhd. $o > a$, また h, r, n, m の前で mhd. $o > a$ となるとされている。

var- が 4 枚に共通している。またこの使用例が圧倒的に多く、34b : 4×, 34c : 2×, 35 : 6×, 36 : 4×であり、全部で16×となる。これ以外は34c : gebaren 1× 35 : Marigengab 1× Pravnstarfer 3×がある。 $o > a$ の生じているのはいずれも -r の前である。注目すべきは35に於て Aussteller の兄弟である Albrecht の場合に Pravnstorfer というように a ではなく o となっていることである。

B には van という $o > a$ の例があったが、4 枚の Uk. との共通性はない。また $a > o$ の例は 4 枚の Uk. にはない⁸⁾。

1.4. ウムラウト表記

上記の I. - III. については 4 枚の Uk. は dialektal-mittelbairisch な書法を示しているが、このウムラウト表記については、むしろ Wiesinger の表での neutral-bairisch な傾向をみせている点に興味がある。即ち、A, B ではウムラウト表記は現れないが、4 枚の Uk. では o のウムラウト表記らしきものが現れる⁹⁾。

34b : Österrich 16

(↔ Osterrich 18 horent 2 Gorig 1,14,19)

34c : gehört 7

(↔ horent 1 Osterrich 11-12,12)

35 : gehört 6

(↔ horent 1 Osterrich 12,13)

36 : hórent 2 Ósterich 5 Wintpózzing 6¹⁰⁾

(↔ Osterrich 12 Osterrich 14 Osterich 17)

これらがウムラウト表記であると断定するには多少問題がある。まず第一にその表記が一貫していない。上の一覧表からわかるように、ウムラウトを表記していない語形が同時に現れる。

第二に Hákchen “[◌]” の多義性である。後の 4 で見るように 4 枚の Uk. で Hákchen はこの他にも色々な使われ方をしている。その中には au の場合のように音声上の理由が考えられない用法がある。

以上のような二つの難点が一応考えられる。しかし前者については A, B が全くウムラウトを表記していないことからわかるように、ウムラウトの表記が未だ確立した書法として定着していないことが考えられる。試行段階にあると思わ

れるのである。また後者については \acute{o} の場合に, au の場合のような音声上の理由のない表記であることを積極的に示す用例がない。

以上のことから \acute{o} はウムラウト表記と考えてよいと思われる。しかし, そうだとするとこれら 4 枚の Uk. は, 1.0. に挙げた I. - IV. の中で, I. - III. については該当するが, 4 についてはあてはまらないことになる。確かに Wiesinger S. 377 は neutral - bairisch と dialektal - mittelbairisch との関係について, 「ある文書が全て neutral - bairisch な書法で書かれることはあるが, dialektal - mittelbairisch な書法は常に neutral な書法と混ざり合って現れる」と述べている。しかし 4 枚の Uk. を A, B と比べた場合も, 4 枚の Uk. は I. - III. については dialektal であるが, 4 では neutral であり, A, B は I. - III. については neutral であるが, 4 では dialektal になる。即ち, I. - III. と IV. とでは両者の関係が逆になってしまう。I. - III. が dialektal な特徴であることはまずまちがいないであろう。そうだとすると問題は IV. のウムラウト表記である。ウムラウト表記の有無は neutral か dialektal かの判定基準としては再考を要するのではあるまいか。今後の調査課題であろう。

2.0. 母音の表記

2.1.0. v/u

2.1.1. 単独の v/u

語中の場合を問題とする¹¹⁾。用例の全てをとりあげて現れる環境に従って分類する。

表 2 v¹²⁾

	34b	34c	35	36	
-n	9	18	12	18	+
-m	2	2	2	2	+
n-	1	1	0	0	+
-l	4	1	0	0	±
mhd.uo>	1	0	0	0	±

表3 u¹²⁾

	34b	34c	35	36		
v-	1	0	0	1	+	vurbas 2x
w-	1	0	0	2	+	Herwurgen 3x
-n	0	0	1	6	-	35:gunst 1x 36: gunst 1x phunt 4x anhangunden 1x
n-	0	0	0	2	-	nutz 2x
-1	1	0	1	2	±	
-r	0	0	2	0	±	
計	3	0	4	13		

一般に Uk. によって v のみを使い, u を使わないものと, v と u を併用するものがある。因みに A は前者, B は後者であった¹³⁾。

表3を見ればわかるように34c 以外は u の使用例がある。この点で34c と他の3枚とは異なっている¹⁴⁾。また36が n の前後で u を多用しているのが目立つ。34c は u を使用していないから別として, 34b は n の前後で u の使用を避けており, 35も gunst の例が一つあることにはあるが, 同様の傾向を示している。

それぞれの Uk. の v/u の使い方については次のように言うことができるだろう。

34b : v を使用する傾向が強いが積極的に使うべき理由がないのに u を使っている例 schullen 12が一つある。

34c : 一貫して v を使っている。

35 : u を使用する傾向が強いが, n, m の前では gunst 2を除き, v を使っている。

36 : u を使用する傾向が強く, n の前後でも v を使わないことが多い。かなり混乱している印象を与える。

2.1.2. \acute{v}/\acute{u} 表4 (\acute{v}) / \acute{u} () 内の数字は \acute{v} の例である。

		34b	34c	35	36	計
mhd.uo >		0	(1)	(1)	1	3
-r	gebúrd	1	1	1	1	4
	vúr	1	1	0		3
	vúrbas				1	
	Herwúrch	1	0	0	0	1
計		3	3	2	3	11

gebúrd は 4 枚共全く同一の形である。また vúr/vúrbas は 35 を除く 3 枚に現れる。

表からも明らかのように、この \acute{v}/\acute{u} で表わされているものには二種類あって、一つは -r の前、他の一つは mhd. uo に由来するものである。周知のように mhd. uo は Bair. では二重母音のまま保たれた。用例の darz \acute{v} , Pr \acute{v} der, get \acute{u} n はそれぞれ mhd. darzuo, bruoder, getuon に由来するものである。従って、その \acute{v} , \acute{u} は二重母音を表わしていることが考えられる¹⁵⁾。

mhd. uo は表 5 からわかるように、多くは ve/ue で表わされている。従って \acute{v}/\acute{u} は中心的な綴り ve/ue に対する周辺的なものと考えられる。

一方 -r の前の場合は、ここにわたり音が発生し易いから、 \acute{v}/\acute{u} の \acute{v} はこのわたり音を表わしているのだらうと考えられる¹⁶⁾。

しかしながら r の前で \acute{u} となっていない例も同時に存在する。34b: Herwurgen 15 35: Durren 5 Purgraf 16 36: vurbas 14 Herwurgen 4, 10 34c にはない。

表5 mhd. uo>¹⁷⁾

	34b	34c	35	36	計	
v	1	0	0	0	1	34b : gvtem
u	0		0	0	0	
ve	2			1	3	34b : mvvet gvvet 36 : mvvet
ue	5	7	11	4	27	
ǔ		1	1		2	34c : darzǔ 35 : Prǔder
ú	0	0	0	1	1	getún
計	8	8	12	6	34	

2.1.3. av/au, aǔ/aú

	34b	34c	35	36
av	verchavffen 11 Havsvrǔw 14		Pravnstarfer 1,10,14 Pravnstorfer 15	wehavsten 6-7
au	zechauffen 4 Hausvrǔw 1 auch 7	chauffen 3	chauffen 3 gechauft 9 hausfrǔw 1 hausvrǔw 10 auch 8,10	zechauffen 4 verchauffen 12 hausvrǔw 4 auch 9
		Auchental 6	auf 13	auf 13
aǔ		Pǔvngarten 6		
aú	Hǔus 7 aúf 7x	aúf 6x aúch 10	aúf 4x aúch 8	aúf 3x aúch 9

共通性がみられるのは -chauf(f)-と aúf である。

-chauf(f)- : 4枚全てに au として現れる。しかし同時に av で表わされている例が34bにある。

aúf : 表にみられるように aú が圧倒的に多い。これはかなり極立った共通性だといえることができる。しかし同時に35, 36にはそれぞれ au の例が一つずつある。奇妙なことに、それはいずれも auf が最後に使われている… vnd auf alle dem guet das wir haben …の部分の auf である。

この他には4枚全てに共通する語はないが、3枚に共通する語として次のものがある。

-haus- : 34cには用例がないが、他の3枚には au が現れる。しかしこの他に
34b: av, áu 36: av の例がある。

auch : au が34cを除く3枚に, aú が34bを除く3枚に現れる。即ち35, 36では au/aú のゆれがある。

av/au, av/aú の違いには音声上の理由が存在せず、全く書法上の問題である。

n の前で使われる例は 34c: Pávngarten¹⁸⁾ 6 35: Pravnstarfer 1,10,14 Pravnstorfer 15だけである。いずれも u を避けて v を使っていると考えられる。両者共これ以外は全て u または ú を使っているからである。

34b, 36には34b: Havsvraú 14 36: wehavsten 6-7という用例があるがこれ以外はやはり au, aú が使われている。混乱しているという印象を受ける。

2.1.4. ev/eu

	34b	34c	35	36
ev		dev 7		
	disev 18			
	Levtoldes 20			
				Levtwein 1,9
	gezevg 21		gezevg 14,15	
	Bartholomevs 23			
		vrevnt 2		
			Nevnzich 7	
			Drevzehen 16	

	34b	34c	35	36
eu	gezeug 19			gezeug 15,17
	Dreutzehen 22	Dreutzehen 15		dreutzehen 18
			freunt 2	vreunt 3
				Leutwein 14

v/u の用法を調べてきた関係からとりあげるが、あまり共通性がみられない。
Dreutzehen : 35のみ ev で他の 3 枚は eu である。

gezevg : 34c には用例がなく、34b, 35: ev 34b, 36: eu となっている。34b では
ev/eu のゆれがある。

vrevnt : 34b には用例がなく、34c: ev 35, 36: eu である。35, 36 は n の前である
のに u を使っている。

Levt- : 34b: Levtoldes 36: Levtwein 2× Levtwein という例がある。36 は ev/
eu のゆれがある。

このように ev/eu の用法には特徴的なものがない。

n の前で使われる例は 'Freund' の場合のみである。35, 36 の用例が示す傾向は
単独の v/u の場合にもみられたことであった。

2.2. 'Frau'

A : vron 10,14,17 Havsvrowe 1 havsvrowen 10,14 havsvrowe 12
Havsvrowen 17

34b : vrawen 6,15 vrawn 6,15 Hausvraw 1,14

34c : Vrawen 16

35 : vrawn 5 hausfrau 1 hausvraw 10

36 : vrawn 4 vrawn 4,10,19 hausvraw 4

36 : Ekhtsa^uw 17 Periga^uw 17

B は A と同じ形である。

名前の前、Hausfrau の場合共、全て -a- が現れている。34b: 6× 34c: 1×
35: 3× 36: 5× の例がある。この点では 4 枚の Uk. に共通性がある。これに対し、
A, B では 7 例全て -o- である。

Urk. II 2, S. 241-242, 257 によれば、a を持つ語形は Bair. と Fränk. に現れる。
しかし、東部でもまた o を持つ形が現れるという。

Krz. §21d によれば mhd. vrouwe のように ou の後に w などの特定の子音が続く場合、Bair. では通常の ou とは別の発展をしたという。

A, B で o が現われるのはこのことを表わしているのであろう。

4 枚の Uk. では 'Frau' が全て -a- であったが、36: Ekhsat_u 17 Perigaw 17 についても全く同じことが言える。後半部分が mhd. ouwe に由来するからである。

2.3. -reich ↔ -rich

34b : Öesterrich 16 Osterrich 18

34c : Osterrich 11, 12

35 : Osterrich 12, 13

36 : Österich 5 Osterrich 12

Osterrich 14 Osterich 17

いずれも -reich ではない点で共通している。

問題のあるのは35,36の -ich という綴りである。35にはこれ以外に比較対照すべき -eich / -ich¹⁹⁾ の用例がない²⁰⁾。36には recht vnd redleich²¹⁾ 8 のようにはっきり -eich と記されている例がある。従って -ich は -eich とは別のもと考えられるであろう。しかし、また -ich と同じとみなすことにも多少問題が残る。-eich と -ich の中間的なものと考えることにも問題がある。-eich は mhd. -ich から来ているわけで、mhd.-ich で i が短音なら -ich のままで、その中間的なものは考え難いのである。

この他に36: Vlrich 1,10,15 Vlrichs 17 という例があって、"Österreich" の場合と同様の現象を呈している²²⁾。

2.4. anhangvnden

4 枚共全て anhangvnden となっている。

-unde に終わる現在分詞は Bair. に特有のものである。(PMS §27.4., Wh §289)

14世紀前半の全35枚の Hardegger Uk. の中、この anhangvnden の語がでてくるのはこの4枚の他には13,16,43b,45,47の5枚だけである。この中で -gen- というように母音が e になっているのは45の1枚しかない。他は13: v 16: u 43b: v 47: v̇ である。

3.0. 子音の表記

3.1. f ↔ v-

‘4’

A	vierdhalbe	4, 5, 9
	vierzich	15
	vier	24
34b	fier	22
34c	fiertzehen	4
	fier	9, 15
35	-----	
36	fier	5, 11

‘für’

A	fvrbaz	10
	fvr	14, 16, 17
34b	vurbas	11
	vúr	16
34c	vúr	11
35	-----	
36	vúrbas	12
	vurbas	14

共通性のある綴りで注目すべきものは‘4’と‘für’である。

‘4’：35には用例がないが、他の3枚ではf-である。これはA, B及び現代語のv-と異なる。

‘für’：35にはやはり用例がない。他の3枚では全てvである。これはA, B及び現代語のf-と異なる。

どちらの場合も、3枚のUk.はf/vについてA, B及び現代の正書法と逆になっている。

Urk. II 2, S. 193 「f+i」の項には「全地域に渡ってv-が一般的な書法であり、f-がこれに次ぐ。…fは特に数詞fier,…に現れる。…これらは特にスイス、マイン川及びネッカル川流域に分布している」とある。その他の地域では断片的な現象に過ぎないとしているが、オーストリアではFriedersbach²³⁾10のfirtzkisten ‘vierzigsten’ という例が挙げられている。

また同書S. 194 「f+u, …」の項には「uの前ではf-が一般的な書法である。特にBair.-Öst.でそうになっている」(要旨)とあり、また「ウィーンからEnns川の谷まででは4地点でv-であり、これに対しf-は14地点で現れる」という。更にS.195で「西に行けば行く程v-が多くなる。…スイスではf-とv-がほぼ均等に分布している」とある。

以上のことから、3枚の Uk. の fier, vur- という書法はこの地域では少数派に属するものであることが推定される。

3.2. sh

普通 sch で表わされるところが、4枚の Uk. では全て sh で表わされている。

Urk. I, S. 59f によれば sh は西南ドイツに多く現れ、Niederösterreich にも若干現れる。しかし一方 Urk. I, S. 70の地図上で 'sollen' の分布を見ると、西南ドイツは sh- ではなく s- であることがわかる。

'sollen' は4枚の Uk. では shullen, shol, sholten として現れる。

また S. 73に Friedersbach 10 shullen の例があり、4枚の Uk. はこの地域固有の書法を示していると考えざるを得ない。

3.3. 重ね書き

36には該当するものがないが、34b: shvllen 34c: shvllen 12 35: shullen 12 という共通する例がある。これらの -ll- は本来 -l- であるべきところのものである²⁴⁾。また A: svln 17 B: sullen であった。Urk. I, S. 69f 'sollen' の項を見ると 13 Jh. に於ても -ll- の例の多い²⁵⁾ことがわかる。ドイツ語で書かれたオーストリア最古の Privaturkunde といわれる1248年の Friedersbach 10に既に shullen の例が出てくる²⁶⁾。

また 34c: zedorffe 7 35: zedorffe 6 という例がみられる。この ff も語源的理由のないものである。しかしそれだけにこの2枚の Uk. の書法の共通性を表わしているものとして注目される。

3.4. -g- ↔ -i-

34b: vergehen 34c: vergich 35: vergehen 36: vergehen

34c: vergich の場合は -g- で表わすのが一般的であるので、同列に論ずることはできない。他の3例は -ge- となっている。これは A, B が -ie- であるのと対立している。

Urk. I, S. 149によれば 1. 及び 3. pl., inf., part. prät. では g-, i- は半々であり、オーストリアでは g- は Niederösterreich に若干みられるのみであるという。

35枚の Hardegger Uk. のうち、該当するものは A, B 及び 4枚の Uk. を含めて 22枚ある。内訳は i- 13×, j- 1×, g- 8×であり、g- はやや少い。

3.5. -m-↔-n-

34b : fvmf 4 34c : fvmf 9, fvmfthalbem 6 35 : fvmf 4,16 36 : fvmf 7 というように全て -m- で共通している。これに対し, A, B は常に -n- である。語源としては germ. *fēm(e) が考えられている。

Urk. II 2, S. 210には「Ober- 及び Niederösterreich では vumf の代わりに、鼻音が唇音に同化した vumf が好んで使われる。vumf が11地点, n の例が6地点ある」と記されている。また「スイスを含む西部では -m- が殆んど現れない」(要旨)という。

3.6. -d↔-t

gebúrd の綴りは4枚共通であり, d で終わっているが, A: -t B: -d であった。'sind' は34b: sind 2× 34c: sint 3× 35: sint 3× 33:sint, sint となっていて, 34b のみ -d で他は -t である。いずれも2~3回使われていて, それぞれの Uk. 内ではゆれはない。また A: -t 2× B: -d 2× であった。

-d/-t の由来については語源的に調べたことがあった²⁷⁾。しかし他方で Ahd. 以来, 鼻音, 流音の後で t>d が生じている²⁸⁾。sind, gebúrd の d はこのことによるのかもしれない。特に sind の場合, このように考えないと他に適当な理由が見つからない²⁹⁾。

3.7. 'dreißigsten'

Uk. の末尾にはその作成年と日が記されている。133□年の「30年に」という語が, 4枚の Uk. ではいずれも dreizkisten³⁰⁾と綴られている。

これら4枚以外の30年代の7枚では次のように綴られている。

32	dreyskistem
33a	Dreizgisten
33b	...treisckisten
34a	Dreizzigistem
34d	Dreizgisten
37	dreizgistem
39	Dreizgisten

33a, 34d, 37, 39が -D/d の違いはあるが -いずれも Dreizgisten である。4枚の Uk. とは g↔k が異なっている。32, 33b は (c)k が使われていて, この点で4枚の Uk. と同じであるが, 語源的には z と書くのが正しいのに s と書いてしまってい

る。4枚の Uk. は語末の場合、35: allez 9 iz 10の他には摩擦音 z を使うことがない³¹⁾。にもかかわらず、この dreizkizten の場合は歴史的に正しい z を使っている。s と書いている 32, 33b は z → s の誤りが少ない Uk.³²⁾ であり、この 'dreißigsten' の綴りで立場が逆転しているのは興味深い。

4. Häkchen

A, B では B の itweders 19を除き、Häkchen は使われていなかった。これに対し、4枚の Uk. は Häkchen を著しく多用していることで共通している。これを分類整理してみると大体次のようになる。

- 1 音声上の理由のないもの
- 2 弱音—これは更に次の二つに分類される
 - 2a わたり音
 - 2b 語末音
- 3 ウムラウト表記
- 4 mhd. uo > \acute{v}/\acute{u}
- 5 -rich
- 6 n音

これらの中で、1は2.1.3.で、2aのうち -úr は2.1.2.の表4で、2bのうち 'Frau', 'Au' は2.2.で3は1.4.で、4は2.1.2.の表5で、5は2.3.で用例を挙げた。ここでは残りのものについて用例を挙げることにする。

	34b	34c	35	36
2a	wir 1,7 (-- wir 6x)		wir 9x	wir 9x
		mir 12		
	ifren 13 (-- irresal 12)			(irresal 13) if 8, 13, 18

	34b	34c	35	36
2b	Mvnizz ⁶ ablazz ¹³	Mvnizz ^{4,9} staineprvnn ¹³⁻¹⁴ (-- staineprnn 1)	Mvnizz ⁷ Leizz ^{7,9} (-- Leizze 5)	Holebrnn ¹ sach ¹⁵
6	phennig 6x	phennig 2x	(phenniḡ 4) (phenniḡ 7)	phennig 5 (-- phennich 7) (-- phenniḡ 7,8)

以上のように Håkchen は様々な用法で使われている。

2.1.のわたり音では r の前の i が問題となる。34c は用例が一つしかないのではっきりしたことは言えない。他の 3 枚では 'wir' の例がかなりある。34b では i が少ないのに 35, 36 では全て i で一貫している。4 枚共 i が現れるがその程度にかなりの差がみられる。

2.2.の語末音については、34c: staineprvnn⁶ ↔ staineprvnn や Leizz⁶ ↔ Leizze といったゆれから弱い音を表わしていることが推測される。36: sach⁶ という例があるが、A: sache B: sach であった。2.2. で見た 'Frau' の諸形もこのことを示している。A, B: vron の場合には母音が脱落しているが -vrowe, vrawen のように e がはっきり示されている例もある。-w̄ の ' は弱まった音を表わしている、と考えられる。

6 の 'Pfennig' についてはかなり問題がある。これは完全な形としては A, B にも使われている phennig という形が標準的なものである。しかしまた省略記号を用いて 35, 36 のように phenniḡ のように表わすことも少なくない。しかし 35 を除く 3 枚に現れる phennig の i という表記は理解に苦しむ。e という音が現れる環境ではないからである。1 のように音声上の理由のないもの、5 のように殆んどこれに近いものがあることはある。従って *phennig と記すのと実質的に等しいとみることもできる。しかし、36: phenniḡ ↔ phenniḡ というゆれがあることを考えると、この ' は一多分に誤って一鼻音 (この場合は n) を表わす省略記号と

して - の代わりに使われているのではなかろうか。

5. 結 び

以上でひとまず調査報告を終る。本稿に記した調査に於ても4枚の Uk. には様々な共通点が見られた。これは以前 s 音の調査を行った段階³³⁾で既にある程度予想されたことではある。4枚の Uk. の書き手の書法が近い系統に属していることは明らかだと思われる。しかし4枚の Uk. には相互に異なる傾向も見出された。これらの共通点、相異点について、より適確な評価を下すには更に他の Uk. を調べてみる必要がある。また共通性という本稿の枠からははずれるが、その他にとり上げて論ずべきことも残っている。しかしこれについては別の機会にゆずることにする。

注

- 1) 拙稿 A, 特に S.87f
- 2) 拙稿 A, S.101f
- 3) 拙稿 B
- 4) Wiesinger S.379-381
- 5) 拙稿 A, S.96f 参照。このときは固有名詞の例を除いた。しかしその後、固有名詞も決して固定した綴りで記されているわけではないことを知り、用例から除く理由はないと考えるに至った。そのため本稿と前稿とでは用例数が異なっている。
- 6) PMS §25によれば14世紀の mbair. に現れる。Krz §50d には r と唇音或は口蓋音との間に発生することが述べられている。
- 7) 語末で g>ch となっていることと関係があるかどうかは不明である。また -werwer- というのは -wer- の書き誤りであろう。
- 8) B の a>o については拙稿 B, 1.3.
- 9) しかし u のウムラウト表記はない。
- 10) 現在名 Windpassing, 1108 Wintpozzingin, ?/1297 de Wintpozzinge; 1323 Wimpeizing, 1340 Wintpözzing; 1363 Wintpaizzing; …等の用例がある (以上 Weigl, W378の項による)。
- 11) 語頭、語末共に v である。A, B の場合については拙稿 B, 1.1.1.1.1. 及び 1.1.1.1.3. 参照
- 12) 表の +, -, 土の意味を u の場合についていえば, + は v ではなく積極的に u を使うことを促がす環境であること, - は u ではなく v を使った方が読み易い環境であること, 土は u であってもなくてもよい環境であることを表わしている。v の場合も同様である。拙稿 B, 1.1.1.1.2. 参照

また n と u が手書きのものにあっては識別不能なことが多いが、その例として 34c: Auchental 6 が挙げられる。この場合、Auch- の u と -ent- の n とは全く同じように書かれてい

- る。このため最初は Au-なのか An-なのかわからなかった。Weigl, I, S. 89 A288 Auggental の項に古くは Auchtental と綴られた例があることを知り, Au-であるとわかった次第である。
- 13) 拙稿 B, 1.1.1.2.
 - 14) 但し, ue, au, eu の例はある。この点で u をどんな場合にも一切使わない A とは異なる。34c に単独の u が現れないのは使われている語彙の関係から偶然そうなかっただけということなのかもしれない。
 - 15) 但し一回だけ34b: gvtem というように mhd. uo が v と表わされている。A: gvtem に対し B: gutem であった。この点で34b は B と共通している。拙稿 B, 1.1.2.3. 参照
 - 16) B: fuer の e もこのわたり音と考えたのであった。拙稿 B, 1.6.
 - 17) 空欄はその文字が当該 Uk. にないことを表わす。0 はその文字そのものはでてくるが mhd. uo に由来するものはないことを表わす。
 - 18) 原文で $\hat{a}v$ となっている。一般に \hat{v} の位置は実際の手書きの文書ではかなり流動的である。勿論この綴りも $a\hat{v}$ の意味で使われていることはまずまちがいないところではあるが, 手書きの実態を伝えるため敢えてもとのままで転写した。34b: Háuus も同様である。
 - 19) -eich/-ich が同時に並行して現れることについては拙稿 B, 1.7. 参照
 - 20) 但し, 主アクセントのない音節に於ける mhd. i > ei の例として Christein 1,5,10 Pilgreim 1,14がある。
 - 21) この語句は同じ形で34b: 7 34c: 9にも現れる。
 - 22) この他の -eich/-ich の例は34b: igleicher 10 Hainreichs 20があるだけである。
 - 23) Niederösterreich の Zwettl の東にある。これは1248年に作成されたもので, ドイツ語で書かれたオーストリア最古の Privaturkunde とされる。
 - 24) 拙稿 B, 2.7.
 - 25) ここは germ. sk の書法を扱っている部分なので, -ll- ↔ -l- については問題とされていない。従ってその地域的分布については不明である。
 - 26) S.73
 - 27) 拙稿 B, 2.5.1. 以下
 - 28) Mettke §46.2, §66 A4
 - 29) 拙稿 B, 2.5.1.1.
 - 30) 34b, 34c では D- である。
 - 31) 拙稿 A, S.107 -z の正用例の欄で, 34b: 0 34c: 1 35: 3 36: 1 となっているが, 34c: 1 → 0 35: 3 → 2 36: 1 → 0 と訂正する。
 - 32) 拙稿 A, S.106の表を参照
 - 33) 拙稿 A, S.101f

文献表

- DuEty=Der große Duden 7. Etymologie 1963
 Kluge=F. Kluge : Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 21. Aufl.
 Krz = E. Kranzmayer : Historische Lautgeographie des gesamtbairischen Dialektraumes. Wien 1956
 松尾 A = 「Hardegger Urkunden 研究—14世紀前半—(1)」 山口大学「独仏文学」第7号 1985

S.77-107

松尾 B = 「Hardegger Urkunder 研究—同日, 同内容の 2 枚の証文 (1324) の相違点—」

山口大学教養部紀要 第20巻 人文科学篇 1986 S.227-260

Mettke=H.Mettke: Mittelhochdeutsche Grammatik 5. Aufl. 1983

PMS=Paul/Moser/Schröbler: Mittelhochdeutsche Grammatik. 20. Aufl. 1969

Urk. I = Käthe Gleißner-Theodor Frings, Zur Urkundensprache des 13. Jahrhunderts. In : ZfMundartg 17, 1941, S. 1-157

Urk. II = Ruth Klappenbach, Zur Urkundensprache des 13. Jahr-hunderts. II, 1 : in: PBB 67, 1944, S. 155-216, 326-356; II, 2 in: PBB 68, 1945, S. 185-264

Weigl=H. Weigl, Historisches Ortsnamenbuch von Niederösterreich. Bd. 1- VIII Verlag : Verein für Landeskunde von Niederösterreich.

Wh=K. Weinhold : Bairische Grammatik. Nendeln 1980

Wiesinger = P. Wiesinger : Die frühneuhochdeutsche Schreibsprache Wiens um 1400. in : PBB (T) 93 (1971) S. 366-389

1334b

1. JCh . Gorig . der Hippledorfer . vnd Jch . Peters . sein Hausvraw̄ . wir vergehen vnd tuen chvnt alle den di den brief
2. sehent lesent oder horent lesen di nv sind vnd hernach chvnftig werdent das wir mit aller vnser eriben gvt
3. tem willen vnd gvnt mit verdachtem mvnt vnd mit gesamter hant . zeder zeit do wir das wol getuen mach
4. ten mit recht . zechauffen haben geben vnsers rechten aigens fvmf phvnt . vnd ainsmidreiz zich phennig wiener
5. phennig geltes . mit alle dem nvtz vnd recht als wirs in aigens gewer her bracht haben . di da ligent datz .
6. steteldorf ba . Weyerwerch . Der erber vrawen vraw̄n Herwurch . von Chvnring . vm sibentzich phvnt wiener Mvniz
7. der wir recht vnd redleich verricht vnd auch gewert sein . vnd di wir geleit haben an vnser . Håus . datz . Michelsteten
8. vnd diselb gvlt leit datz steteldorf aúf drin lehen drithalb phvnt wiener phennig geltes . vnd achtzehn ches das
9. der . ches drei wert sei . vnd daselb aúf ainer Mvl sechtzich phennig geltes . vnd sechs ches vnd aúf zwain . hofsteten
10. sechtzich phennig geltes . vnd zwai fashanch huen . vnd achtzehn ches . vnd aúf Dreitzehen Hofsteten aúf igleicher
11. Hofstat zwaintzich phennig geltes . vnd drei ches . vurbas allen iren frvm da mit zeshaffen versetzen vnd verchavffen
12. vnd geben wem si wil an allen irresal . vnd shullen wir vnd vnser eriben sei oder wem si das guet shaft . oder geit
13. an dem ablaz̄z ander Mvl nindert ifren . danne das si in haben shol . mit alle dem recht als

- er ba vns gewesen ist . vnd
14. ze pezzter sicherhait so setze ich mich vargenanter . Gorig . der Hippledorfer vnd ich . Peters sein Havsvráw . vnd alle vns'
 15. eriben der erb'n vrawen vraw'n . Herwurgen . von Chvnring . oder wem si das guet geit od' shaft ze rechtem sherm vber
 16. di vargenant gvlt vúr alle ansprach als aigens recht ist vnd des landes sit vnd gewonhait in Österrich . wer aber
 17. das si mit recht andem vargenanten guet chainen shaden nem . den shol si haben aúf vns vnd aúf alle vns'm gvlet
 18. das wir haben in dem lande ze Osterrich . Das disev red also stet vnd vnzebrochen weleib dar vber so gib ich var
 19. genanter . Gorig . der Hippledorfer disen brief ze einem waren gezeug diser sahhe versigelt mit meinem anhangvnden
 20. Jnsigel vnd mit der erb'n herren Jnsigel hern Levttoldes . von Hakenwerch . hern Wichards . von winchel . h'n Hainreichs
 21. von Puechhaim vnd mit meins Vetern Jnsigel . Hermans des Hippledorfer di der sahhe gezevg sind . Der brief ist geben
 22. do man zalt nach Christes gebúrd Dreutzehen Hvndert Jar darnach in Dem fier vnd Dreizkisten Jar des
 23. Mitchens ansand Bartholomevs tag

1334c

1. JCh Ott von sitzendorf von staineprvnn . vergich vnd tuen chvnt alle den di den brief sehent oder horent lesen di nv
2. sint vnd her nach chvnftig werdent . das ich mit aller meiner eriben guetem willen vnd gvnt . nach meiner besten vrevnt
3. rat ze der zeit do ich das wol getuen macht mit recht ze chauffen han gegeben dem erb'n herren hern . Alber . von
4. Chvnring vnd alle seinen eriben . zehen phvnt geltes vnd fiertzehen phennig geltes wiener Mvniz̃ . di mein recht
5. lehen gewesen sint von dem erbern herren hern . alber . von Chvnring der var genant ist . vnd di gelegen sint datz
6. Auchental . aúf fvmfthalbem lehen vnd aúf siben Hofsteten . vnd aúf ainem / Pávngarten . vnd aúf ainer . wis . mit alle
7. dev vnd darzú gehört . zefeld vnd zedorffe gestift vnd vngeistift versuecht vnd vnversuecht wi so das genant ist
8. vnd mit alle dem nvtz vnd recht als ichs in lehens gewer her bracht han . vm Hvndert phvnt vnd zehen phvnt
9. vnd fvmf shilling vnd vm fier phennig wiener Mvniz̃ der ich recht vnd redleich verricht . vnd auch gewert
10. bin . vnd bin aúch des selben guetes des eegenanten herren hern . Albers . von Chvnring

vnd aller seiner eriben

11. rechter sherm vnd gewer vúr alle ansprach als . lehens . recht ist vnd des Landes sit vnd gewonhait in . Oster
12. rich . vnd/was in dar an ab get das shvllen si haben aúf mír vnd aúf alle dem guet das ich han in . Osterrich
13. Das di sache also stet vnd vnzebrohen weleib dar vber so gib ich/var genanter . Ott der Sitzendorfer von staine
14. prvnñ disen brief ze ainem vrchvnd der/warhait versigelt mit meinem anhangvnden Jnsigel . Der brief ist
15. geben do man zalt nach Christes gebúrd Dreutzehen Hvndert Jar dar nach in dem fier vnd Dreizkisten Jar
16. des nachsten Svntages nach vnser Vrawen tag als si gebaren ward .

1335

1. JCh Pilgreim der Pravstarfer vnd ich . Christein . sein hausvráw wír vergehen vnd tuen chvnt di den brief sehent oder horent lesen di
2. nv sint vnd hernach chvnftig werdent . das wír mit guetem willen vnd gunst aller vnser eriben nach vnser besten freunt rat ze derzeit
3. do wír das wolgetuen machten mit recht . ze chauffen haben geben dem erbern herren hern Alber von Chvnring vnd allen seinen eriben
4. sechs phvnt geltes vnd fvmf shilling vnd aindlef phennig geltes di vnser recht lehen gewesen sint von dem eegenanten vnserm herren h'n
5. Alber von Chvnring . vnd di mein var genanter vrawñ . Christein . recht Marigengab gewesen sint . vnd ligent ze Dvrren Leizze aúf Lehen
6. vnd aúf Hofsteten mit alle dem vnd dar zv gehört zefeld vnd zedorffe gestift vnd vngestift versuecht vnd vnversuecht wi so das
7. genant ist vnd ain . wis . die leit zwishen . Leizz' . vnd . Weichartsdorf . vm Nevnich phvnt phennig wiener Mvnizz' . der wír gantz vnd
8. gar verricht vnd aúch gewert sein . wír haben auch dem vargenanten herren hern . Alber . von Chvnring . das guet vnd ander guet das
9. er emaln von vns gehauft hat vnd was wír zeleizze' von im zelehen . gehabt haben allez aúf gegeben mit guetem willen an der stat
10. da wír iz zerecht tuen sholten . wír sein auch ich vargenanter . Pilgreim . der Pravstarfer vnd ich . Christein . sein . hausvráw . vnd alle
11. vnser eriben des vargenanten herren hern . Albers . von Chvnring . vnd aller seiner eriben . vber . das vargeshriben guet recht gewern.
12. als ein recht ist vnd des Landes sit vnd gewonhait in Osterrich . vnd was in dar an ab get das shullen si haben aúf vns vnd
13. auf alle dem guet das wír haben in dem Lande ze . Osterrich . Das di sache also stet vnd vnzebrochen weleib dar vber so gib
14. ich vargenanter . Pilgreim . der Pravstarfer disen brief ze einem waren gezevg diser sache

versigelten mit meinem anhangvn

15. den . Insigel . vnd zepepper sicherhait mit meins Prvder Insigel Albrechts . des Pravnstorfer . der der sache gezevg ist vnd di zeit
16. Purgraf ze Gvnthartsdorf Der brief ist geben do man zalt nach Christes . geburd Drevzehn Hvdert Jar darnach in dem fvmf
17. vnd dreizkisten Jar des Freitages ansand Giligen tag

1336

1. JCh Levtwein von Svnnerwerch di zeit gesezzen zeHolebrvn̄ . vnd ich . Vlrich . von Svnnerwerch sein svn wır vergehen vnd tuen
2. chvnt alle den di den brief sehent oder hórent lesen di nv sint vnd hernach chvnftig werden . Das wır mit wol wedachtem
3. mv̄et . vnd mit guetem willen vnd gunst aller vnser Eriben . nach vnser besten vrent Rat ze der zeit do wıf das wol getún
4. machten mit recht . zechauffen haben geben der erbern vráwn vráwn Herwurgun . her Albers . hausvráw von Chvnring vnser rech
5. ten . aigens . das wır haben in dem Lande ze Ósterich siben phunt geltes vnd fier phennıg geltes mit alle dem nutz vnd recht als
6. wırs in rechter aigens nutz vnd gewer her bracht haben . di gelegen sint ze Wintpózzing . der leit aıf gestıftem guet vnd auf weha
7. vsten . Holden . sechsthalb phunt geltes an ainen phennıch geltes . vnd aıf vberlent zwelıf shilling geltes vnd fvmf phennıg geltes . di
8. gult alle hab wıf if recht vnd redleich geben vm siben vnd sibenzich phunt vnd vm sechs shilling vnd vm zwelıf phennıg wiener
9. Mvnizz der wıf gantz vnd gar verricht vnd auch gewert sein . wıf sein aıch ich vargenanter . Levtwein . der svnneriger vnd ich —
10. Vlrich sein svn der svnnerig' vnd alle vnser . eriben . der vargenanten vráwn . Herwurgun . von Chvnring . der var geschriben siben
11. phunt geltes vnd fier geltes aigens . recht sherm vnd gewer als aigens recht ist vnd des Landes sit vnd gewónhait in —
12. Osterrich . sı shol auch vırbas mit der vargeschriben gult allen iren frvm shaffen mit versetzen mit verchauffen vnd geben wem
13. sı wil an allen irresal . Vnd was if dar an ab get das shol si haben aıf vns vnd vns'n eriben vnd auf alle dem guet das wır ha
14. ben vnd lazen in dem lande ze Osterrich Das di sache vırbas stet vnd vnzebrohen weleıb dar vber so gib ich oft genanter . Leutwein
15. der Svnneriger . vnd ich Vlrich . der svnneriger sein svn disen brief ze ainem waren gezeug diser sach' versigelt mit vnser
16. baider anhangvnden Insigeln . vnd ze bezzer siherhait mit der erbern herren Insigel hern Andres von svnnerwerch h'n . Chadolds
17. von Ekhtasáw h'n. Vlrichs . von Perigáw hern . Jańsen . von Chvnring Obrister shen in

Osterfch di der sach^e gezeug sint mit

18. ifen anhangunden Jnsigeln . Der brief ist geben do man zalt nach . Christes . gebufd dreutzehen hvndert Jar dar nach in dem
19. sechs vnd dreizkisten Jar des Freitages an vnser vrawⁿ tag zeder Liechtmisse